

沖縄戦を伝えるということ

米田 はる香

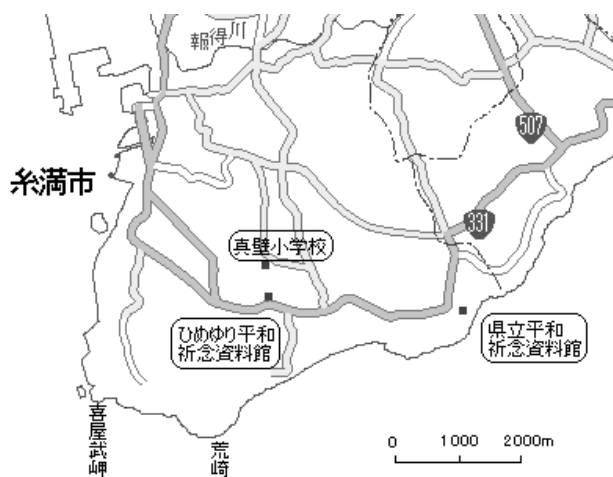
- I はじめに
- II 沖縄戦の概要
 - 1) 戦闘経過と戦没者数
 - 2) 一般住民の被害
- III 沖縄戦はどのように伝えられてきたか
 - 1) 記録運動
 - 2) 資料館
 - 3) 平和教育
- IV まとめ

I はじめに

「沖縄」というとき、沖縄戦を忘れてはならないと考える。沖縄は日本で数少ない（注1）戦場になった場所であり、県民の30%もの人々が犠牲になるという残酷なものであった。避難壕には戦争の傷跡が残り、慰霊塔がいたるところに建てられ、今も米軍基地が住民の生活と隣り合わせになっている。このように、沖縄と戦争は切り離せないものである。しかし、戦後60年が経とうとしている今、戦争中に生きた人々は高齢になり、多くの方が亡くなっている。そんな中で戦争を知らない世代へどのように沖縄戦を伝えていくのが問題になっているように思われる。

そこで、沖縄戦とは一体どのようなものであり、どのように伝えられてきたのかを調査し、その結果をこの報告書により明らかにする。

現地では、沖縄本島南部にあるひめゆり平和祈念資料館と県立平和祈念資料館を訪れ、資料館での沖縄戦の語られ方を調査するとともに、糸満市立真壁小学校を訪問し、平和教育という観点から、沖縄戦がどのように伝えられているのか聞き取り調査をした。

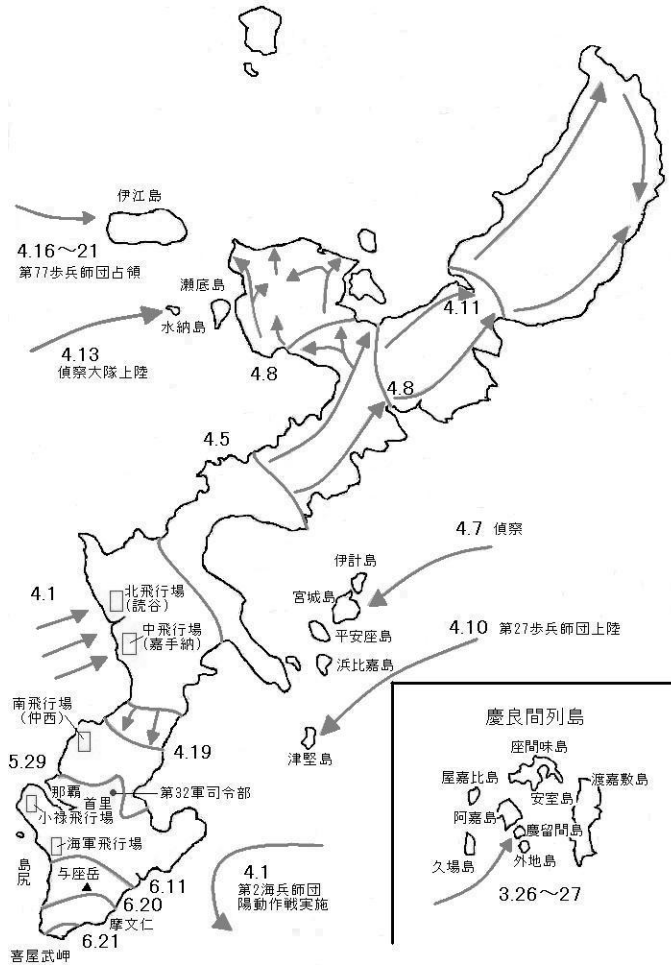


第1図 訪問先の地図

II 沖縄戦の概要

1) 戦闘経過と戦没者数

沖縄戦の戦闘経過を右の図と下の年表に示す。沖縄戦が長期戦であったこと、南へ南へと米軍に追い詰められていったことが伺える。



第2図 沖縄戦戦闘経過

数字は月日、矢印はアメリカ軍の進行を示す。

出典) 新崎 (1997)、太平洋戦争研究会 (2003) より作成

(月日) 第1表 沖縄戦戦闘経過表 (1945年)

| | |
|------|-------------------------------------|
| 3.26 | アメリカ軍、慶良間列島へ上陸 |
| 3.29 | 日本第32軍の命令で鉄血勤皇隊編成 |
| 4.1 | アメリカ軍、沖縄本島へ上陸、仲泊と石川の線で本島を南北に分断 |
| 4.4 | 第32軍司令官、攻勢を決意するが夜半に撤回 |
| 4.5 | 第10方面軍の要請を入れ、8日から第32軍攻勢決定、7日取り消し |
| 4.6 | 沖縄航空特攻始まる |
| 4.7 | 戦艦「大和」を中心とする水上特攻艦隊、撃滅(「大和」沈没) |
| 4.11 | アメリカ軍、那覇・首里方面への進撃開始 |
| 4.12 | 大本営、第32軍へ中飛行場(嘉手納)奪還命令、総攻撃失敗 |
| 4.16 | アメリカ軍、伊江島へ上陸 |
| 4.19 | アメリカ軍、首里外郭陣地へ総攻撃 |
| 4.21 | 日本軍、嘉数陣地を撤退、首里防衛線の一角が大きく崩れる |
| 5.4 | 第32軍、前線で総攻撃。翌日に中止 |
| 5.11 | アメリカ軍、首里防衛線への総攻撃開始 |
| 5.22 | 第32軍、首里放棄・島尻地区(南部喜屋武地区)への撤退を決定 |
| 5.24 | 義烈空挺隊、嘉手納飛行場へ強行着陸、全員玉砕 |
| 5.29 | アメリカ軍、首里を占領 |
| 5.30 | 第32軍司令部、摩文仁の洞窟に移動 |
| 6.4 | 第32軍主力、喜屋武・摩文仁地区の配置完了/アメリカ軍、小禄地区に上陸 |
| 6.13 | 小禄の日本海軍部隊司令官大田実少将自決 |
| 6.16 | アメリカ軍、日本軍の最後の防衛線・与座岳を攻略 |
| 6.17 | アメリカ軍、海上からラウドスピーカーを用いて、 |

| | |
|------|---|
| 6.18 | 喜屋武・摩文仁一帯の日本軍・避難住民へ投降を呼びかける 島田県知事、摩文仁の軍司令部訪問のあと消息を絶ち、以後消息不明 ひめゆり部隊の一部49人、米須の壕で玉砕（自決） 沖縄攻略のアメリカ第10軍司令官バックナー中傷戦死 |
| 6.21 | 牛島第32軍司令官、第10方面軍へ訣別電報 アメリカ軍、日本軍最後の拠点・真壁と89高地（摩文仁の第32軍司令部所在地） を占領 |
| 6.23 | 午前4時30分、牛島軍司令官・長参謀長自決。組織的戦闘終わる |

出典) 太平洋戦争研究会 (2003)

沖縄県援護課資料によると、沖縄戦での戦没者数は右記のようである。沖縄戦は、できるだけ“本土決戦”の時間をかせぎ、あわよくば「天皇制護持」を条件とする和平交渉への道を探そうとする“捨て石作戦”として引き延ばされたため、必要以上に多くの犠牲、特に一般住民の犠牲を生んだ。

第2表 沖縄戦戦没者数

| | | |
|---------------------------|--------------------|--------------------------------------|
| 沖縄戦の 戦没者総数 200,656人 | 沖縄県出身者 122,228人 | 一般住民 約94,000人 軍人・軍属 28,228人 |
| | 県外出身日本兵 | 65,098人 |
| | 米軍 | 12,520人 |

出典) 新崎 (1997)

2) 一般住民の被害

戦争にかりだされた学徒たち

1944年春、第32軍（沖縄守備軍）が創設されると、県下の中等学校の生徒は全員飛行場建設や陣地づくりに動員された。学舎は兵営となり、授業は中断された。そして45年早々、いよいよ敵上陸必至の情勢になると、学徒たちは鉄血勤皇隊や通信隊に編成されて次々と入隊していった。学徒たちは陸軍二等兵の軍装で、斬込隊、野戦築城隊、通信隊、伝令班などの任務を与えられた。15歳から19歳までのにわか兵隊である。なかでも、師範学校の生徒は軍司令部の直属であっただけに、首里戦線では急造爆雷を背負って肉弾攻撃に参加し、摩文仁に移動してからも、伝令や水汲み、食糧確保などの任務に就いた。激しい砲爆撃の中、野外を駆け回る生徒たちの行動は最も危険な任務だったのである。実は、学徒隊には6月18日に解散命令が出ていたのであるが、連絡が不徹底で、学徒たちは軍司令部の最後の総攻撃にも参加させられ、摩文仁近くで200名近くの若い命を散らしてしまった。

また、女子学生も沖縄戦に動員された。1945年3月24日、島尻郡玉城村港川方面へ米軍の艦砲射撃が始まった。沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の職員生徒297名は、軍命によって、看護要員として、直ちに南風原陸軍病院の勤務についた。それが「ひめゆり学徒隊」である。戦闘が激しくなるにつれて、前線から運ばれる負傷兵の数は激増し、病院の壕はたちまち患者であふれかえり、南風原村一日橋・玉城村糸数にも分室が設けられた。看護婦・生徒たちは、昼夜となく力の限りを尽くして傷病兵の看護を続けた。日本軍の首里撤退も迫った5月25日の夜、南風原陸軍病院は、重症患者は壕に残し、歩ける患者だけを連れて摩文仁村に移動した。その後、病院は本部・第一外科・糸数分室・第二外科・第三外科に分かれて業務を続けた。6月18日いよいよ米軍が間近に迫り、看護隊

は陸軍病院から解散を命じられた。翌19日、第三外科の壕は敵襲を受け、ガス弾を投げまれ、奇跡的に生き残った5名を除き、職員生徒40名が息絶えた。軍医・兵・看護婦・炊事婦等29名、民間人6名も運命をともにした。その他の壕にいた職員生徒たちは、壕脱出後弾雨の中をさまよひ、沖縄最南端の断崖に追い詰められて多く命を絶った。

住民殺害と集団自決

阿嘉島では、規律を犯した朝鮮人軍夫が虐待され処刑されたり、捕虜になった老夫婦が日本兵に虐殺されたりしている。

座間味島では、敵上陸の直前に役場職員が住民の避難壕を回って「住民は男女を問わず軍の戦闘に協力し、老人子どもは忠魂碑前に集合、全員自決する」と伝達してあったが、砲爆撃が激しくて集合できず、めいめい家族壕で手榴弾、カミソリ、鎌などで自殺した。

渡嘉敷島では、絶望の淵に追い込まれた人々は部隊から支給された手榴弾で家族ぐるみで自爆を決行した。自爆に失敗した人々は棍棒や鍬などで互いに頭を殴りあって凄惨な死に至った。また、元教頭の防衛隊員、伊江島出身の保護住民6名、島の少年2名がスパイ容疑などで軍刀で“処刑”されている。

米須集落では比較的平穏な避難生活を送っており、誰もが首里が陥落すれば戦闘は終わるものと信じていた。しかし、6月18日頃から日本軍の前線が崩壊し、敗残兵が部落内の洞窟になだれ込んできた。兵隊たちは日本刀を振り回して住民を壕から追い出し、持久戦に備えると称して食料を徴発した。喜屋武半島はたちまち阿鼻叫喚の修羅場と化した。弾雨の中を転々と逃げ回った挙句、人々が最後に追い詰められていったのは米須海岸の洞窟の中だった。この壕が米軍に包囲されたとき、人々は防衛隊員が持ち込んできた手榴弾で家族ごと自爆した。

沖縄戦ではこのように各地で住民殺害や集団自決が行われ、多くの人々が無残な死に方をした。

III 沖縄戦はどのように伝えられてきたか

1) 記録運動

終戦後、島の主要部分をアメリカの軍用地に占領されたままの状態が食糧生産に支障をきたし、沖縄では、完全な無秩序に加えて飢餓、負傷、不潔、病気がはびこった。沖縄の戦略的な重要性に気づいたアメリカは、沖縄を日本から分離して恒久的な基地化を図ろうとした。沖縄と小笠原は国連の信託統治領としてアメリカが統治するという方針が明らかになった1950年ごろ、沖縄住民は公然と日本復帰運動に立ち上がった。復帰要求は自治と平和と生活向上の要求と一致しており、軍事占領支配からの解放をめざした要求でもあった。1955年ごろ、軍用地問題がきっかけとなり、ようやく本土でも沖縄の実態が注目されるようになり、沖縄の無期限占領などのプライス勧告に住民の怒りは爆発し、「島ぐるみ土地闘争」に発展した。

72年復帰が確定した1970年前後、県民の戦争体験を記録する、沖縄戦体験の掘り起こし運動が起こった。土地闘争や基地闘争などの島ぐるみの運動がピークになるときにはいつも戦場の体験が想起された。本土一体化の流れに呑み込まれようとする状況の中でアイデ

ンティティーの危機感が高まり、今こそ沖縄戦体験の歴史的な意味を捉え直そうとする意識が働いたからであると大城（1989）は言う。

60年代後半から、日本政府の援助によって、南部戦跡では霊域整備計画が進められた。建てられた慰霊塔の碑文は軍隊の論理に建つ「玉砕思想」の賛美であり、沖縄戦跡に靖国神社の支社ができたような景観になった。そこには、戦闘に巻き込まれて、地獄のような極限状況にまで追い込まれていった一般住民の姿が完全に欠落し、「行軍」の兵士たちが、同胞たる沖縄住民に加えた仕打ちが全く隠されている。非難壕から追い出されて弾雨の中に消えてしまった者、スパイの汚名を着せられて“処刑”された者“集団自決”を強要されて肉親同士殺しあう惨劇のうちに絶命していったものがいた。鳴き声を挙げる幼児は絞め殺され、足腰の立たない老人は弾雨の中に置き去りにされていった。敵兵よりも友軍兵が怖かったというのが一致した証言である（大城 1989）。

記録運動の口火を切ったのは『沖縄県史』だった。琉球政府が事業として始め、沖縄全域の戦争被災の状況について聞き取り調査を行い収録した。その後、記録運動は各市町村史に引き継がれて裾野を広げ、その実相を深く抉り出す成果を挙げていった。こうした戦時記録運動の成果は、78年にオープンした県立平和祈念資料館の展示に反映され、「日本による住民虐殺」や「集団自決」など、戦場の赤裸々な諸事実が沖縄戦の重要な局面として全面的に浮き彫りにされた。80年代には県議会も、「沖縄戦の実相を正しく教科書に記述すべきである」という意味の要請決議を行った。

こうした戦争体験の掘り起こし運動の成果に立って、沖縄戦体験の意味が様々な角度から議論され、沖縄戦後思想史の核心的な部分に位置づけられるようになってきた。その成果として大城は次の3点を挙げている。

- (1) 従来の軍隊本位の戦史が照明を当てることのなかった戦場の実相を科学的な方法で客観的、全面的に浮き彫りにし、従来、美化され歪曲されてきた沖縄戦像を大きく修正した。
- (2) 戦争体験を個々人の感傷の領域に閉じ込めるのではなく、それを意識化し、思想化していく方向に発展させた。
- (3) (2)によって、戦争と民衆、軍隊と住民の関係が明らかにされ、観念的、心情的な平和論をより理論的、本質的な平和論へと変化させた。

しかし、軍隊の論理に立つか、民衆の論理に立つかによって戦争体験の今日的な意味の受け取り方が異なり、二つの論理が沖縄の戦跡において激しくしのぎを削っているのが現状であるとも述べている。

このような中で、沖縄戦を扱った資料館がどのような役割を果たしているのかを次の節で見たいと思う。

2) 資料館

ひめゆり平和祈念資料館

1989年6月23日、第三外科壕（注2）上に立つ「ひめゆりの塔」の並びに開館。財団法人「沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会」が数年にわたる資金づくり運動とひめゆり隊生存者による証言・資料収集活動によって自らの手で「後世にひめゆりの真実を伝え永遠に世界平和を訴え続ける」趣旨で設立した平和ミュージアムである。建物は戦前のひめゆり学舎を模した赤瓦葺で、約千平方メートルの回廊式の展示場は5室に分かれている。

第1展示室「ひめゆりの青春」、第2展示室「ひめゆりの戦場」、第3展示室「解散命令と死の彷徨」、第4展示室「鎮魂」、第5展示室「回想」。展示全体の基本テーマを「戦争と教育」にしぼり、これまで流布されてきた“ひめゆり哀話”を強調するのではなく、ひめゆり学徒たちの悲劇の本質に迫ろうとする姿勢である。体験者の証言を基礎にして、ひめゆり隊をはじめ、師範学校女師部、県立第一高等女学校の生徒・職員219名の戦没者の悲劇の足跡を記録した構成になっている。

開館後、生存者たちは毎日3、4人ずつ証言をするために資料館に通い続けている。当初は28人だったが、現在は18人である。現地調査3日目（12月8日）午前、ひめゆり平和祈念資料館を訪れた。第2展示室に入ると、横穴の壕に二段ベッドが置かれただけという病院壕のジオラマの前で、一人のおばあさんが立っていた。

その方に「生存者の方ですか」と尋ねると、次のようなことを話してくださった。

沖縄には40～50mくらいの壕が40本あった。その中の一つが南風原陸軍病院として使われた。沖縄戦が始まると、ここには負傷者が次々に運ばれてきた。木材で作られつづけられた二段ベッドに座れる人は座り、一つのベッドに7人も8人も患者がいた。壕の中はすぐに患者でいっぱいになり、外まであふれていた。その中でひめゆり学徒隊は、毎日患者の食事や排泄などの身の回りの世話におわれていた。食事といえば、一日に小さなおにぎりたった1個で、両手の使える人は米粒を一粒ずつ味わって食べていた。重症患者の命はもって4、5日。傷口にウジが湧いている患者は痛くて「殺してくれ」としきりに訴えていた。5月25日、南風原陸軍病院にもアメリカ軍が接近し、とうとう撤退命令が出た。本当に壕の穴から米軍が肉眼で見えるくらいまで近づいていた。重傷者には「あとでトラックに乗せてい

写真1 ひめゆり平和祈念資料館



写真2 ひめゆりの塔



く」と言ったが、重傷者はみな置いていかれた。

私も、何度も人の死に立ち会うことがあった。戦時中、表向きにはみな「御国のために死ぬ」というが、実際死ぬときにはみな父や母のことを考え、家族のことを口にした。(津波古ヒサさん)

話の内容から、沖縄戦の悲惨さが伝わってきた。また、話し振りは、声は小さかったものの、ほとんど淀みなく、ここで何度も証言をしてきたことが伺えた。

次に第3展示室に足を踏み入ると、そこでは「解散命令」後の数日間で、100余名のひめゆり学徒が死亡した時の悲劇を、生存者の証言ビデオで伝えていた。次のような証言を聞くことができた。

逃げ惑う中、日本兵に「殺してください」と言うと、一人の兵隊が「殺してやる」と応えてくれた。そこで目を瞑って待っていたが、なかなか殺してくれない。そっと目を開けると、手榴弾を持った兵隊が「やっぱり殺せない」と言って手榴弾をポケットに入れた。(島袋淑子さん)

壕の中でヘアピンを落とし、それを探すのにしゃがんだ。その時、壕の入口が爆発し、みんな吹っ飛んだ。みんな重傷を負い、3名が即死した。結局動けない重傷者8名を置いていくことになった。米軍に追い詰められたときは死ぬように教えられていた。でも本当はみんな生きたかった。(上原当美子さん)

周りでは自決する玉の音がしきりに聞こえていたが、自分たちには死ぬ方法がなく、死ぬことができなかった。針を飲むことなども考えた。そのときはみんな死のうと思っていた。(宮城信子さん)

空からB29が海に向かって艦砲射撃をしてきた。周囲は煙に囲まれ、「やられた」と言う声があちこちから聞こえてきた。アダンの中で「お父さん、お母さん、助けて」と祈っていた。(照屋苗子さん)

爆撃を受け、学友がけがをした。けがをしたお腹はどんどん腫れ、学友は家族のことを言いながら静かに死んでいった。ほかにも重傷を負った学友がいたが、「ごめんね」と言って壕を後にした。たいへんすまないことをした。(木村つるさん)

ここでの証言でも、多くの無残な犠牲者を目の当たりにしたこと、米軍に追い詰められたら死ぬように教育されていたこと、死ぬ間際には家族のことを口にしたことなどが強調されていた。

県立平和祈念資料館

写真3 県立平和祈念資料館

1975年6月、糸満市摩文仁の平和祈念公園（日本軍司令部最後の地）に旧館が開館。石原（2002）によると、その建設の意図は全て日本政府から出たものであり、県立資料館といたながら、県民の意見を反映する機会が全く設けられていなかった。民間レベルでの沖縄戦資料館の設立



運動は開館の10年前から始まっていた。その推進母体は当時の屋良朝苗知事が会長を務める沖縄教職員会で、かなりの資料も集まり何度か展示会も催していた。にもかかわらず、資料館建設を任された県援護課の職員が、これまでの資料館建設運動の歴史をまるで知らぬままに、結果として県民の運動を無視してしまったと石原はいう。県援護課は厚生省から委任された援護業務を取り扱う窓口である。また援護課の所管になっている慰霊奉賛会は「戦没者の御霊を奉慰顕彰」する目的を持って戦跡霊域の管理を任された外郭団体であり、沖縄協会（注3）の霊域整備事業も委託されている。つまり、両者とも政府の影響を受けやすい立場にあったからだ。

軍隊関係の資料は山ほどあるのに比べて、一般住民の戦争体験を物語る資料は一点も見当たらないし、学徒隊関係の資料さえ展示されていない。完璧なまでの軍隊本位、作戦中心、そして県民不在の展示になっており、県民の批判を浴びるのは明らかであったと石原は主張する。

批判の口火を切った沖縄戦研究者グループは、1975年6月のオープン直後から展示内容の改善を求める「意見書」を作成し、運動体として「沖縄を考える会・準備会」を結成した。同年9月初旬、県援護課は知事の指示を受けて学識経験者を集めて意見を聴取。結果は当時の展示を全面的に撤去、改めて白紙の状態から展示の内容を考え直すというものだった。翌年3月に「資料館運営協議会設置要綱」を制定、6月から運営協議会を発足、9月下旬に資料館の基本理念を成文化した「県立平和祈念資料館の設立について」が採択された。その内容は大きく3つに分けられる。

- (1) 沖縄戦の定義＝日本で唯一の（注1より、硫黄島の例も確認される）激しい地上戦であったこと。
- (2) 沖縄戦の特徴＝住民犠牲が軍人を上回ったこと。
- (3) 県民の戦争体験を結集して資料館をつくること。

基本理念の答申と同時に、協議会の下に展示計画に関する専門委員会が置かれ、さらに具体的な展示作業にたずさわる総合プロデューサーの下に展示演出委員会が設置された（1976年11月）。

こうして1977年初頭から展示作り作業が開始されたが、県民の戦争体験を具体的にどう表現するかとなると、予想以上の難題になった。軍隊中心の展示であれば実物資料も文献資料も豊富にあるが、住民は物も記録も残さない。そもそも、一般住民が体験した極限状況は、果たして実物資料や映像資料や文献資料などで再現できるのか、という疑問が積みまとった。

そこで、展示演出委員会は『沖縄県史』の沖縄戦記録一・二巻、『那覇市史』戦時記録、石原昌家著『虐殺の島』の中から最もインパクトの強い証言を選び、その中から沖縄戦の本質に迫る証言を抽出して沖縄戦の全体像が浮かび上がるような構成を工夫した。また、以前は「英霊の遺品」として恭しく陳列されていた銃剣や鉄兜は、「住民の視点」にこだわった結果、避難民たちが目撃した戦場の光景を構成するオブジェとして展示することになった。

現地調査3日目（12月8日）午後、県立平和祈念資料館を訪れた。ここでの展示は、犠牲者の写真や模型など、かなりビジュアルに訴えるものだった。その中で証言を文章で読ませる第4展示室が逆にいちばん目立っているように感じた。薄暗い部屋には証言が書かれた大きい冊子が整然と机に並べられ、いすに座って読めるようになっていた。冊子は北部・中部・那覇市・南部・離島という風に、地域によって分けて置かれていて、沖縄戦の時間経過がわかるようになっていた。

誰かの「殺して」という声に共感したこと、朝鮮人の中から米を盗んで食べたと十数名が銃殺されたという「処刑」の話などが綴られていた。また、死ぬように教育されていた中で、「この戦は必ず負けるから死ぬことだけはするな」と言う人もいたという証言もあった。いくつか読んでみたが、どの証言も、生きるか死ぬかの瀬戸際にいる人間の異常な状態や心情が綴られ、戦争の恐ろしさを伝えていた。

ここまで、ひめゆり平和祈念資料館と県立平和祈念資料館という沖縄戦を扱った資料館について見てきた。これら二つの施設は、沖縄戦の記憶の継承という役割を果たしているといえるが、それとともに、展示方法によっては偏った考えを訪れた人々に植えつけかねないともいえる。

3) 平和教育

資料館という施設を通じた記憶の継承と並んで、沖縄では平和教育が沖縄戦を次世代に伝える役割を果たす。

沖縄で平和教育という場合、県内学校の教育実践の課題としての平和教育、県外から訪れる沖縄修学旅行（平和学習旅行）への対応という二つの活動分野をいう。

ガマ体験など、実際の戦場跡を訪ね悲惨な戦場体験を追体験できるのは今では沖縄しかない。1986年から「戦跡・基地案内人養成講座」が開かれ、1987年に「平和ガイドの会」が結成された。現在では「沖縄平和ネットワーク」と名称を変えて会員約150人の大組織になり、戦跡・基地ガイド、学習会、講演会、戦跡調査などが日常的に頻繁に行われている。

一方、沖縄の平和教育の特徴は以下のようである。

- (1) 沖縄県民の沖縄戦の体験
- (2) 戦前の皇民化教育、軍国主義教育への深刻な反省
- (3) 祖国復帰運動との関連
- (4) 基地問題との関連
- (5) 沖縄の独自の歴史と文化との関係

理論的、組織的に平和教育が学校現場で取り込まれるようになったのは、本土からかな

り遅れて60年代になってからである。沖縄教職員会（のち沖縄県教組）では、沖縄は基地を歩けば戦跡にぶつかるし、戦跡を歩けば基地にぶつかるというように、基地問題と沖縄戦体験は循環構造をなしているのだから、これらに関連させて教えるということになった。教職員会が確認した平和教育の規範方針は、①沖縄戦で教える、②基地で教える、③民族的課題（復帰問題）と関連させて教える、の三点であった。この方針の下で、60年代から70年代を通して沖縄の平和教育は大きく前進した。次はその具体的な内容の一例である。

(1) 一斉特設授業

教職員会の提唱で、琉球政府文教局の協力を得てはじまった。広島と並んで最も歴史が古く、内容も多彩で充実した実践例である。

(2) 個別的実践活動

米軍支配下の諸運動と関連して、教師が自主的に創意工夫して実践してきた。教科における自主編成、生活指導、作文指導、読書指導などを通して「地域に根ざした教育」の中から平和の問題を考えていく。

(3) 学校行事での取り組み

修学旅行、文化祭、学習発表会などで沖縄戦と基地問題をとりあげる。

(4) 戦跡・基地めぐり

毎年、「6・23慰霊の日」の前に沖縄県教組などの主催で行われる。

(5) 体験記録活動

6・23特設授業の一環として父母や祖父母の戦争体験の聞き取り記録を文集にまとめる作業として始まった。

(6) 映画・演劇・読書活動

沖縄戦に関する図書、記録映画や劇映画、テレビ作品、演劇作品は数多く製作されており、学校図書館などでこれらの作品をとりあげた読書会や資料展、全校鑑賞会などが催されている。

現在では、「情報化・国際化等の進展は、今後、一層拡大し、加速化されることが予想されることから、21世紀に生きる幼児児童生徒の国際性を培い、世界の平和を愛し、希求する幼児児童生徒を育成することは重要なことである。このため、本県の歴史や地域の特性を考慮し、平和教育を各学校の教育計画に位置付け、学校の教育活動全体を通じて、計画的・組織的・継続的に推進する必要がある」（沖縄県教育委員会 2004）とされる。

糸満市立真壁小学校の場合

ここまで平和教育について取り上げたが、実際小学校ではどのような平和教育がされているのだろうか。沖縄県南部の糸満市にある真壁小学校を訪ね、宮里安英先生にお話を聞かせていただいた。

宮里先生によると、真壁小学校では、あらゆる教科や普段の生活に平和学習を取り入れている。平成12～14（2000～

2002）年度までの3年間、この小学校では平和教育の研究が推進された。そこで「5つの平

写真4 糸満市立真壁小学校



和観」、すなわち、①自然を大切にする、②夢や希望を持つ、③美しい心を育てる、④命を大切にする、⑤人権を尊ぶというものが設けられた。この平和観を基にしたことを普段の生活から取り入れているようだ。例えば、挨拶をしたら折鶴を一つおるとか、後の人のためにトイレのスリッパをそろえるといったことをしている。

平和月間（注3）には、6年生が中心となって平和教育を進める。沖縄戦パネル展示や地域にある公園や戦跡の掃除をし、平和集会（注4）は6年生が運営する。これによって1年生は6年生に憧れ、6年生も憧れの的ということでやる気になり、いい循環になっているようだ。平和集会では、みんなで歌を歌ったり、作文を発表したり、沖縄戦の聞き取り調査からつくった劇をしたりしたようだ。この劇は6年生の最後の締めくくりにようなもので、聞き取り調査は児童の「おじい」（おじいさん）、「おばあ」（おばあさん）を招いて行われた。身近な人から話を聞くことで、より子どもたちの心に響くようであるとのことだった。

「なぜ普段から平和学習を取り入れているのか。」という問いに対して、宮里先生は、次のようにおっしゃった。以前は、平和教育といえば「戦争のこと」であった。しかし、戦争のことばかりの平和教育ばかりすると、児童はうんざりして、平和教育に向かう気持ちを落としてしまう。そこで、日常の生活の身近なところから平和学習を取り入れることで、戦争とも向き合える心を持たせることをねらいとしている。

また、「では普段から平和学習をするようになったのは、戦争学習からの発展であるのか。」と質問すると、戦争学習からの「発展」ではなく、むしろ「並行」である。「戦争」についてもやるし、「いじめ」についても、「バリアフリー」についてもする。平和の考え方は様々な場面があり、全てが同等に平和学習であるといえるとのことだった。

そして、「先生の立場で戦争をどう受けとめているか。平和学習をどのように考えているか。」と尋ねると、非常に多くの人びと、特に地域の人々が亡くなった戦争、人間をおかしくさせる悲惨な戦争を子どもたちに伝えていくべきである。しかし、戦争のことにのみになると、平和学習への意欲が弱くなる。そのため、「戦争状態でないこと」がすなわち「平和」であるのではなく、普段の生活の中で平和を取り入れることによって、戦争にも目を向けられるようになる。このような学習は必要であるとの考えだった。

真壁小学校の実践から確認できることは、平和学習を戦争学習に限るのではなく、日常の生活の仕方から平和を考える姿勢であった。しかし、このような平和学習をしている小学校は、平和教育の研究が推進された喜屋武小学校、米須小学校、真壁小学校くらいである。その他の小学校では、毎年6月23日前後に集会は行われるが、「戦争学習」をすなわち「平和学習」とする傾向が強いようだ。

IV まとめ

ここまで、沖縄戦はどのように伝えられているのかを見てきたが、資料館での戦争の語られ方については、事前に調べた沖縄戦の印象とあまり変わるところがなかったように思う。すなわち、戦争が語られるとき、住民が犠牲になった悲惨なエピソードが大半を占め、「住民は被害者」という面ばかりが見えやすくなっているように思われる。では、沖縄であれほどの犠牲者が出たのはなぜなのか。第2次大戦中、熱心に戦争を支えていたのは、戦前の日本社会の指導者たちだけではなく、多くの国民も、本気になって、そう思い込ん

で、戦争の担い手になっていた。戦争に動員された学生であっても、多くの学生は、戦争に動員されてから初めて戦争の悲惨さを知り、そこでようやく戦争と国家の命令に反発する心を持ったと高橋（1989）はいう。国家や軍隊の戦争責任は多く語られてきたが、民衆には、学徒隊には果たして戦争責任はなかったのか。

民衆の戦争責任について語られるとき、そこには2つの立場がある。一つは、住民の一方的な犠牲者意識に疑問を感じ、住民は犠牲者であると同時に戦争の担い手であり、加害者でもあったとする立場である。それに対して、当時の厳しさも知らずに安易な論議は単なる中傷に過ぎないとする立場がある。また、戦時経験の悲惨さについて多くを語る人々は、その悲惨な状況に陥る経過については、あまり多くを語ろうとしない。沖縄戦を感情的な部分を語るのももちろん人々の心に訴えるためには重要である。しかし、そればかりにとらわれず、様々な点から沖縄戦を見つめ、どうして非常に多くの犠牲を防ぐことができなかつたのかを語ることも、人々が沖縄戦を考えるためには必要ではないだろうか。

資料館などで戦争が語られるとき、どうしても語る側の意図が含まれ、強調される部分が出てくるようだ。ひめゆり平和祈念資料館にしても、県立平和祈念資料館にしても、沖縄戦の悲惨さ・残忍さを伝えようとするあまり、視点が一方に偏ってしまっている観がある。もっと様々な視点から沖縄戦に関して行われてきた議論を明らかにし、ただ「沖縄戦は悲惨であった。戦争はいけないものだ」で終わってしまうのではなく、そこからもっと深く沖縄戦を考えさせる必要があると思う。

また、後世に戦争を伝えるにあたってネックになるのは小学校での平和学習であると私は考える。今回訪れた真壁小学校では、日常生活で平和を取り入れるというのが、新鮮だった。戦争を知らない世代に、戦争のことを考えさせ、また次の世代へと伝えさせるためには、小学生という感受性豊かな年頃から平和学習に触れさせることが大切であると思う。しかし、何でも吸収してしまう年齢であるだけに、偏った考え方を植えつけないようにもする必要がある。その点では、真壁小学校の平和学習は評価できるものであると思う。しかし、平和教育の研究が推進された学校のように、普段から取り組みをしている学校が少ないことにも留意するべきである。また、真壁小学校では、研究が推進された3年間にとどまらず、これからも平和教育を深めていってほしいと思う。

戦争を語り伝えるとき、語る人の考え方によって偏った伝わり方をする恐れがある。それを避けるためには、様々な方向から「戦争」と「平和」を捉え、様々な考え方を伝えるべきではないだろうか。

今回の調査を終えて振り返ってみると、初めてのことが多く、一つの段階を踏むのにも多くの時間がかかってしまい、現地に入ったときにはまだ準備不足だったように思う。また、調査方法についても要領を得ていない部分があり、あらが多かったように思う。しかし、あまり経験がないことであるだけに勉強になったことも多かった。今回の調査での経験を卒業論文など今後の研究に生かしていきたいと思う。

《付記》

今回の調査でひめゆり学徒隊の証言をしてくださった津波古ヒサさん、小学校の平和教育について教えてくださった宮里先生、その他調査に協力していただいた多くの方々に深くお礼申し上げます。

注

- 1) 沖縄のほかに、第二次世界大戦最大の激戦地の一つとして東京都小笠原村硫黄島が挙げられる。戦後は米軍、後に自衛隊の基地として使われているため、一般の人はなかなか訪問できないが、それだけに激戦の跡や亜熱帯性の豊かな自然が残されている（石井 2005）。
- 2) 正確には、伊原第三外科壕。ガス弾攻撃によって多くの犠牲者が出た。
- 3) 沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会（1956～72年5月）のあとを受けて、1972年9月20日に設立された内閣府所管の公益法人。平和で豊かな沖縄県の建設に寄与するため、沖縄戦終焉の地・摩文仁（糸満市）に建設された沖縄平和祈念堂の管理運営、沖縄出身青少年の勉学支援、沖縄の地域振興及び学術振興に貢献する人材の発掘と育成のための沖縄研究奨励賞、沖縄に関する諸問題についての研究会、機関誌の発行及び資料室の運営等の諸事業を実施している（沖縄協会 2005）。
- 4) 沖縄市では、戦争の惨めさの記憶をつなぎながら、生命の尊厳と平和の尊さを家庭から地域へ、全国へ、世界に広め、次の世代に平和な地球を引き継いでいく努力の基点とするために、1995年8月1日、当時の市長新川秀清によって8月1日から9月7日までを平和月間とする宣言がされた。（新川 1995）また、沖縄の平和月間は、8月だけでなく、沖縄戦が終結した6月から始まることもある（普天間バプテスト教会 2005）。真壁小学校では、6月3日から28日を平和月間とする。
- 5) 戦争体験者のおじいさん、おばあさんの話を聞くことや、全校児童で集会を持つことにより、戦争や平和について考え、真壁小学校から平和を発信することをねらいとして催される。

文献・資料

新川清秀（1995）：非核・平和沖縄県宣言。

<http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/okinawaheiwasesengen.htm>

新崎盛暉他（1997）：『観光コースでない沖縄』高文研。

石井顕勇（2005）：硫黄島探訪。 <http://www.iwojima.jp/>

石原昌家（1978）：『虐殺の島』晩声社。

石原昌家（2000）：『沖縄の旅・アブチラガマと轟きの壕』集英社新書。

石原昌家他（2002）：『争点・沖縄の記憶』社会評論社。

糸満市立真壁小学校（2001・2002・2003）：『平成12・13・14年度 沖縄県教育委員会指定 糸満市教育委員会指定 平和教育研究校 研究紀要』

伊波園子（2002）：『ひめゆりの沖縄戦』岩波書店。

大城将保（1989）：『昭和史のなかの沖縄－ヤマト世とアメリカ世－』岩波書店。

沖縄協会（2005）：（財）沖縄協会ホームページ。 <http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/>

沖縄県教育委員会（1989）：『沖縄県史』国書刊行会

沖縄県教育委員会（2004）：小学校・中学校における指導の努力事項。

<http://www-edu.pref.okinawa.jp/gimu/doryoku/2004/02.pdf>

太平洋戦争研究会編（2003）：『図説 沖縄の戦い』河出書房新社。

高橋彦博（1989）：『民衆の側の戦争責任』青木書店。

那覇市企画部市史編纂室（1974）：『那覇市史 資料編 第2巻中の6 戦時記録』。

ひめゆり平和祈念資料館（2004）：ひめゆり平和祈念資料館。 <http://www.himeyuri.or.jp/>

普天間バプテスト教会（2005）：教会の紹介. <http://church.ne.jp/futenma/kyokai.html>
マピオン（2005）「沖縄県糸満市字大里」付近地図. <http://www.mapion.co.jp/c/f>